

2008.2.25.

宮城県重症心身障害児（者）を守る会・大崎分会「福祉茶話会」

講話・レジメ
「障害児（者）の親として できること」

阿部 幸泰
「雑学」HP：<http://www.h4.dion.ne.jp/~dekunobo/>

親として できること

イ) 障害のある子どもの観方

“Children with disabilities are children, first.”

“ My child is not only mine, but also a person.”

“才母サンの機能”

ロ) 地域を地域の人々と共に育てること。

地域に、我が子がいることを知つてもらう努力をすること。

(プライバシーの側面との葛藤もあるだろうが、ある程度は勇気をもつように。)

ハ) 障害児がいる親（特に母親）は、初期段階では孤独、孤立になりがち。

先輩親たち、関係機関（者）は、「いつも、側にいますよ」と常に声掛けを心懸けるように。

「相手を理解するのではなく、相手が自分を理解者と認めてくれる関係を築くこと。」

“Not doing, But being.”

ホ) 親同士連携、連帶すること。

一人、二人では遠慮や声が小さくなりがち。

→ 親同士連携して声を大きくするように。 ← 他地域の親からも知恵を借りること。

障害者自立支援法では、各市町村が窓口 ← 各市町村の担当者を育てるのも、親の任務。

「専門家は、指導や助言以上に、親の不安感を取り除いてください。

親にエネルギーをいっぱい与えてください。

そうすれば親子で前向きに生きていく勇気が生まれます。

それは、障害を治すことと同じくらい、いえ、それ以上にありがたいことです。」

ヘ) 「地域で共に生きる社会」とは

単に地域の福祉資源を利用することだけではない。

それ以上に、地域の方々（親も含め）が共に生活する地域社会の構築、意識改革こそが必要であり、目標となる。 → 地域とは、場所でなく、地域の人々との繋がり。

ト) 関係機関・者の連携とは

すぐれたネットワークとは、まず情報を共有し、地位や立場とは関係なく、

①（担当のケースに抱く）個人的で感覚的な不安や感想も話題にできるような、ざっくばらんな場であることがとても重要。

②そのケースに関わる周囲の人たちが、お互いの大変さや内面の揺らぎを、仲間として支え合うこと。

「人間相手（教育）の仕事には、ゴールはない。

係わることでなく、係わり合い続けること。

知識と技術に裏打ちされた知恵をいかに働かせるかのチャレンジ精神と、
自らを検証する勇気が必要。 ← プロの資質」